

An Analysis of a Children's Novel as an English Teaching Material

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒崎, 紫乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/853

《研究ノート》

英語教材としての児童小説に関する一分析

黒崎 紫乃

1. はじめに

英語は多くの国々の人に使用される機会が極めて高い言語であるが、その英語で書かれた膨大な量の情報を読む力はインターネットの普及と相俟って社会の様々な場面で必要とされている。このような中で、日本人英語学習者の読解力は伸び悩んでいる。2015年のTOEFL iBTのリーディング・セクションのスコアの平均は、他の複数のアジアの国々の中でも非常に低い水準を示している（図1）。このスコアは、2010年から全く変化がなく低い水準のままである。僅かではあるが、リスニングやライティングの平均スコアが伸びている現状を考えると、リーディング・スキルの改善は日本人学習者における課題の一つであると思われる。

2015 TOEFL iBT
Reading Section Score Means

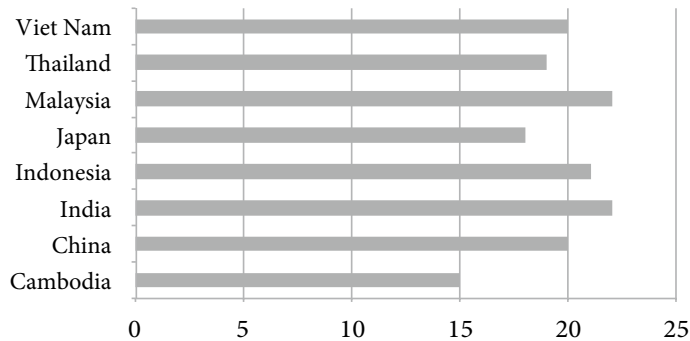


図1 TOEFL iBT Reading Section Score Means (2015)
("Test and Score Data Summary for TOEFL iBT® Tests 2015" より著者作成)

近年、大学の英語教育においては、リーディング・スキルを改善する方策の一つとして多読がよく用いられている。その効果についても、日本人学習者を対象にした研究において内容理解の向上や読みのスピードの改善が指摘されている（Iwahori, 2008; Yamashita, 2008）。その一方で、レベル別に書かれた多読教材は、含まれる表現や内容の詳細度には一定の制限が生じる。多読の教材は、難解な未知の語彙を多く出現させるのではなく、レベルに応じた語彙を使用して原作を書き直し、学習者のレベルに合った表現に繰り返し触れさせることによってリーディングのスピードとスキルを改善させることを目的の一つとして作成されているためである。では、このような英語教材として書かれたレベル別の読みものでは

なく、通常の文学作品として書かれた読みものについては、内容、語彙表現の両面から見て、どの程度適切と言えるだろうか。ここでは、武蔵野大学薬学部の教養教育課程1年生のリーディング・スキルを主眼においた授業において使用した原書の児童小説を語彙表現の面から調査、分析し、児童小説の英語教材としての特徴について考察する。また、読後に行ったアンケートによる意識調査も加え、教材としての適性について論じる。

2. 英語教育における児童文学作品の使用についての先行研究

海外での英語教育において、児童文学を成人の学習者に使用することについての研究は数多い。Leal (2015) は、ハワイ留学中の学習者を対象に絵本を使用した学習を行い、教材としての絵本を使用した方法は、リーディング、ライティングおよびクリティカル・シンキングの育成という点において、児童ではない大人の学習者にも効果的であることを示した。また、Chen (2006) は、台湾の英語専攻の大学生1年生を対象に児童文学を読ませ、ライティング活動にもつなげ、インプットとアウトプットを促進するプロンプトとしての児童文学の使用を紹介している。文学は、習熟度が高い学習者のためのものではないか、と思われそうであるが、Walther (2007) によると、文学を使用する利点は学習者に言語がどのように文脈の中で使われているかを知るモデルとなるため初級者にも良い。同時に、感情的に関与することができるため、読みながら自分の人生に関連づけることができる利点もある (Gajdusek & vanDommelen, 1993)。

一方、日本では児童文学やその他の文学作品が大学での英語教育において取り入れられることは少ない。1980年代以降の国内の英語教育に見られる実用的な英語力育成を目指す方針の中で、実用的な英語を教材として使用したことが主な要因の一つであると考えられる (高橋 2015:57)。しかし、Kramsch and Kramsch (2000: 563) も指摘するように、文学は読解力のみならず、語彙力や批判的に考える能力 (クリティカル・シンキング) を育成する上で有益な教材であるため、英米他の外国語教育では見直されている。また、多読教材においてはレベルに合わせて書き直された児童文学作品が学習者によって使用されることは多く、原文ではないものの内容の面白さに触れることはできる。

更に、語彙力の増強は読解力向上のために欠かせない要素の一つであるが、児童文学作品における語彙は、その物語が対象とする年齢やトピック、物語の長さにもよるが、多様な種類の語彙が含まれている。ストーリーの中で、そのような語彙に繰り返し触れることは、学習者の語彙の定着に効果があるものと想像される。しかし、このように有効と思われる教材としての児童文学作品において、どのような言葉が実際に使用されているかについては、明らかになっていない。具体的に、どのような語句が使用されているのであろうか。

3. “Charlotte’s web” における高頻度語と2語連鎖・3語連鎖

本研究における分析対象作品は、アメリカの作家 E. B. White による児童小説、“Charlotte’s web” である。1952年に出版されたこの小説は、アメリカの田舎の農場で生活する子豚の

ウィルバーとクモのシャーロットの友情物語で、食肉としていつか殺されてしまうのではないかと心配するウィルバーをシャーロットがその機知で救出しようと奮闘するというストーリーである。本国アメリカにおいては、小学中～高学年程度を対象として出版当初より児童小説ジャンルのベストセラー書として長い間人気を博し続けてきた。これまでに世界で4500万部を売り上げ、23か国語に翻訳され、2006年には映画も制作、公開された。2012年にはアメリカの学校図書雑誌における9～12歳を対象とした小説についての読者調査で、ハリーポッターなどを抜いてトップを獲得している。児童文学作品としての受賞歴も、1953年にアメリカ合衆国で毎年最も優れた児童文学に贈られるニューベリー名誉賞を、1970年にはアメリカ児童文学の功労者に贈られるローラ・インガルス・ワイルダー賞を受賞するなど、現代アメリカ児童小説の代表格として長く読まれ続けている作品である。

この児童小説を取り上げた理由は、出版時から半世紀以上もの間、読者に高い人気を誇っていることが示しているように、シンプルで分かりやすい表現の中に友情や生命についての大切なメッセージが多く書かれているため、10代の大学1年生にも受け入れられやすいのではないかと考えたからである。小学生を対象にして書かれているため、大学生には幼稚に感じられるのではないかとという危惧もあったが、扱われているテーマは友情や生命という全ての年齢の読者に共通して受け入れやすいものであったことも教材として使用した理由の一つである。

語彙の側面から見ると、この児童小説に含まれる総語数31,455語のうち、英語を母国語として使用しているコーパスにおける高頻出語と共通したものは多い。ここでは、“Charlotte’s web”をスキャンしたものをテキストファイル化し、それをオンライン・コンコーダンサーであるAntConcを使用して検索し、高頻度出現単語と高頻度n-gram (n個の連鎖する単語)について抽出した。高頻度出現単語の抽出のみでなく、高頻度n-gramを分析することによって、英語教材としての児童文学作品の特徴を把握し、教材としての適切さを判断することができると思われる。比較の対象として、1億語の話し言葉、書き言葉のイギリス英語からなる大規模コーパスであるBritish National Corpus (BNC)における書き言葉コーパス (written texts)を使用した。ここでは多様なコーパスを集積したSketch Engineというインターフェースを使用した。このインターフェースでは、膨大な量の言語情報が検索可能である。本研究ではBNC全体の89.49%を占めるwritten textsを選択し、英語の書き言葉における比較対象とした。

表1 “Charlotte’s web”, BNC written texts corpus 総語数

	総語数
Charlotte’s web	31,455
BNC written texts corpus	112,345,722

n-gram とは、n語の連続する単語の塊のことで、文法的まとまりはないが、固まりとして頻出する語句のパターンのことである。“Lexical bundles” (Biber et al., 1999) や “word cluster” (Carter & McCarthy, 2006), “multi-word unit” (Wray, 2002) などとも呼ばれ、言語分析や言語学習において重要な単位であると考えられている。2語の連鎖はbigram, 3

語連鎖は *trigram* と呼ばれ、コンピューターにおける機械的なカウント方法としてコーパス言語学の分野で使用されている。また、言語学習において、語句は個々の単語ではなく、頻出する複数の語の固まり (*chunk*) として学習されるため、頻出する *n-gram* の習熟は学習者にとって有効であると考えられている (赤野他, 2014)。また、特定の分野における語の固まりは、その分野に特徴的な表現を表す重要な役割があると言われている (Biber & Barbieri, 2007; Cortes, 2004)。

まず、各単語について、“Charlotte’s web”における上位 30 語を BNC written texts と比較したところ、表 2 の通り双方において共通するものが非常に多かった。

表 2 “Charlotte’s web” と BNC written texts における高頻度出現上位 30 語

	Charlotte's web	Raw Frequency	Normalized Frequency	BNC written texts	Raw Frequency	Normalized Frequency
1	the	1945	61834	the	5,021,870	44700
2	and	1170	37196	of	2,853,133	25396
3	to	802	25497	to	2,334,238	20777
4	a	795	25274	and	2,289,242	20377
5	he	602	19138	a	1,844,698	16420
6	of	557	17708	in	1,651,456	14700
7	I	535	17008	is	874,398	7783
8	in	462	14688	that	856,746	7626
9	Wilbur	457	14529	was	795,662	7082
10	you	418	13289	for	766,257	6821
11	it	414	13162	on	615,370	5477
12	was	382	12144	The	602,610	5364
13	said	379	12049	it	596,671	5311
14	that	289	9188	with	594,190	5289
15	she	287	9124	be	588,841	5241
16	his	284	9029	as	562,300	5005
17	charlotte	236	7503	I	557,377	4961
18	her	210	6676	by	469,616	4180
19	on	189	6009	at	441,041	3926
20	is	183	5818	are	410,396	3653
21	for	181	5754	he	398,608	3548
22	at	175	5564	had	389,510	3467
23	fern	166	5277	not	387,074	3445
24	with	161	5118	from	386,525	3440
25	pig	152	4832	have	379,661	3379
26	zuckerman	149	4737	his	368,543	3280
27	out	146	4642	which	340,298	3029
28	as	144	4578	you	333,390	2968
29	up	144	4578	or	327,663	2917
30	had	143	4546	an	300,586	2676

“Charlotte’s web”においては、固有名詞である “Charlotte,” “Wilbur,” “Zuckerman” などの登場人物の名前等の高頻度出現は小説に特有なものであるが、その他の語（冠詞の a/the, to, of, in 等の前置詞、he, it, that 等の代名詞等）については大半が共通している。また、West (1953) による高頻度書き言葉基本単語リスト、“General Service List” に含まれる 2,284 語のうち 7 割弱に相当する 1,515 語がこの作品には使用されていた。これは、児童向けの小説における高頻度出現の単語は、一般の書き言葉コーパスから大きく逸脱してはいないことを示していると考えられる。

次に、複数の連鎖する単語の集まりである n-gram について抽出した結果、まず 2 語連鎖の bigram については、表 3 の通りとなった。

表 3 “Charlotte’s web” と BNC written texts における高頻度上位 30 の 2 語連鎖

	Charlotte’s web	Raw Frequency	BNC written texts	Raw Frequency
1	in the	193	of the	718,404
2	of the	160	in the	445,773
3	to the	133	to the	269,615
4	don t	91	on the	187,748
5	into the	86	and the	176,324
6	and the	84	to be	171,829
7	i m	80	for the	149,830
8	mr zuckerman	65	at the	124,422
9	on the	62	by the	120,830
10	said the	61	that the	119,836
11	wilbur s	61	of a	118,704
12	the goose	60	with the	115,964
13	it s	58	from the	114,441
14	mrs arable	57	in a	98,625
15	the barn	57	it is	82,086
16	he was	55	as a	77,361
17	said charlotte	55	with a	71,934
18	he said	52	is a	71,016
19	it was	49	it was	70,304
20	the rat	46	have been	65,581
21	at the	45	will be	64,999
22	in a	45	had been	63,081
23	said wilbur	44	for a	63,071
24	he s	42	was a	58,067
25	to be	42	to a	55,551
26	the web	41	has been	55,079
27	going to	40	is the	54,728
28	i don	40	as the	54,322
29	mrs zuckerman	40	can be	52,274
30	from the	39	and a	51,204

“Charlotte’s web”において使用されている最も高頻度に出現している2語連鎖は、BNC written texts においても同じ2語連鎖である、前置詞 + 定冠詞 “the” の組み合わせであった。この共通した3種類の2語連鎖において使用されている前置詞の種類についても全く同じもので、in, of, to と定冠詞の組み合わせであった。その他にも、この組み合わせは双方に高頻出しており、on, into, at, from 等、同じ前置詞と定冠詞 “the” の2語連鎖の高頻出が見られた点は共通していた。その一方で、高頻出2語連鎖における前置詞の種類については、BNC written texts のほうが by, for, with 等やや多く見られた。また、“Charlotte’s web”においては、“said the,” “said charlotte,” “he said,” “said Wilbur”に見られるように物語という性質上、その前後に台詞が出現していることを表す2語連鎖が見られたのに対して、BNC written texts にはこのリストの高頻出2語連鎖には見られなかった。反対に、BNC written texts に高頻出している “have been,” “had been,” “has been” といった完了形や、“will be,” “can be” といった助動詞を含んだ2語連鎖は、“Charlotte’s web” では全く見られなかったが、“going to” の表現のうちほぼ全てが “be going to” という形で時制を表すために高頻度で使用されていた (表4)。

表4 “Charlotte’s web” における going to の使用例

1	again at supertime, and again just before	going to	bed. Mrs. Arable gave him a feeding around
2	and sat down. He didn’t fit feel like	going to	sleep, he didn’t fit feel like digging.
3	real friend here in the barn, it’s	going to	rain all morning and all afternoon, and Fern
4	little pig. He doesn’t even know what’s	going to	happen to him around Christmanstime; he
5	I guess,” said the goose. “What are you	going to	do with it?” coninues Templeton, his li
6	they’re fattening you up because they’re	going to	kill you, that’s why.” “They’re going
7	going to kill you, that’s why.” “They’re	going to	what?” screamed Wilbur. Fern grew rigid
8	sheep says, Charlotte? Is it true they are	going to	kill me when the cold weather come?”
9	“What? Really?” cried Wilbur. “Who’s	going to	save me?” “I am,” said Charlotte. “How?”
10	“That remains to be seen. But I am	going to	save you, and I want you to quiet
11	never more serious in my life. I am not	going to	let you die, Wilbur.” “How are you going
12	to let you die, Wilbur.” “How are you	going to	save me?” asked Wilbur, whose curiosity
13	live in a tree, with my frog.” “I’m	going to	visit Wilbur,” Fern announced. They climb
14	enough?” “That’s a fine spider and I’m	going to	capture it,” said Avery. He took the cover
15	box. Then he picked up a stick. “I’m	going to	knock that old spider in this box,” he
16	“A rat never knows when something is	going to	come in handy. I never throw anything
17	Having such an importatn pig was	going to	mean plenty of extra work, he could see
18	boy?” grumbled the rat. “I’m not	going to	spend all my time chasing down to the

更に、3語連鎖 (トリグラム) についても同様に比較調査したところ、表5のような結果となった。この比較においては、“Charlotte’s Web” と BNC written texts における高頻度上位3語連鎖に共通していたのは、“out of the,” “a lot of,” “the end of,” “I don’t” の4種類のみと非常に少なかった。BNC written texts においては既に指摘されている通り、“one of the,” “a number of,” “some of the,” “percent of,” 等の数量を表すものや “as well as,” “the fact that,” “in terms of” 等、説明的な文章によく見られる語句の種類や頻度が高かったが、

“Charlotte’s Web”における高頻度3語連鎖は、“the old sheep,” “said mrs arable,” “the barn cellar”等の物語の描写に直接関連性が高いものが多かった。

表5 “Charlotte’s web” と BNC written texts における高頻度上位30の3語連鎖

	Charlotte’s web	Raw Frequency	BNC written texts	Raw Frequency
1	i don t	40	one of the	26,860
2	the old sheep	22	the end of	18,643
3	in the barn	21	I do n't	18,515
4	out of the	20	as well as	16,257
5	bee bee bee	19	part of the	15,493
6	said mrs arable	19	out of the	13,951
7	the barn cellar	18	a number of	12,882
8	into the air	15	end of the	12,068
9	the top of	15	some of the	11,375
10	i m not	13	per cent of	11,179
11	said mr zuckerman	13	be able to	11,159
12	top of the	13	to be a	10,322
13	i can t	12	the fact that	10,233
14	in front of	12	in order to	9,739
15	said the goose	12	there is a	9,415
16	spider s web	12	a lot of	8,143
17	don t want	11	the number of	8,058
18	of the web	11	in terms of	7,982
19	spin a web	11	that it is	7,757
20	charlotte he said	10	the use of	7,742
21	closed his eyes	10	at the end	7,553
22	into the crate	10	there is no	7,339
23	it s a	10	that it was	7,236
24	the end of	10	there was a	7,193
25	the loud speaker	10	the rest of	7,126
26	to the fair	10	can not be	7,085
27	a lot of	9	members of the	7,075
28	charlotte s web	9	the same time	7,045
29	in the straw	9	the first time	7,013
30	it was a	9	do n't know	6,806

2語連鎖で明らかになったことと共通している点は、“in the barn,” “into the air,” “into the crate,” “of the web,” “to the fair,” “in the straw”等、物語に現れる場所やものに直接関連した前置詞を含む表現の高頻度である。物語に登場する人物やものと直接関連がないものでは、前置詞を含む“out of the,” “top of the,” “the end of,” “the top of,” “in front of”といった位置を表す表現が高頻出していたという点である。

以上のように、“Charlotte’s web”における語句については、まず単語レベルでは、BNC written texts と共通するものが非常に多く、児童小説である本作品に特有な単語は高頻度

30 語には少なかった。2 語連鎖においても前置詞と the または a といった冠詞の組み合わせが高頻出であることが BNC written texts と共通していた。ただし、BNC written texts における助動詞を含む時制表現の種類のほうがやや多いことが分かった。さらに、3 語連鎖における比較では BNC written texts と共通するものは極めて少なく、2 語連鎖において見られたのと同様にここでも前置詞を含む語句で尚かつ物語に固有なものや位置を表す前置詞表現が“Charlotte’s web”ではより高頻出していることが分かった。

4. TOEIC スコアとアンケート調査結果

上記のような単語及び 2 語連鎖、3 語連鎖の特徴を有する“Charlotte’s web”を読む活動を終了した学生を対象に 2017 年度 4 月及び 7 月に受験した TOEIC のスコア比較を行い、同時にアンケート調査も行った。まず、入学時の 4 月と 7 月の 2 回共受験した 15 名を対象に TOEIC のスコアの平均値については、リスニングとリーディングの総合スコアのため個別のセクション毎のスコアはないものの、総合的に見ると 40 ポイント上がっている。また、4 月の平均点と 7 月の平均点の差が統計的に有意かどうかについて確かめるために、有意水準 5% で両側検定の t 検定をおこなったところ、 $t(14)=2.06, p < .03$ であり、3 か月の前後の平均点の差は有意であることがわかった。

表 6 TOEIC スコアに関する比較表

n=15	平均値(M)	標準偏差(SD)	最高点	最低点
4 月	651.3	45.88	730	590
7 月	691.3	79.09	850	595

次に、読後のアンケート意識調査における 6 つの項目についての結果は、以下の図 2 の通りとなった。6 つの項目は、内容の難しさ、内容の面白さ、課題の多さ、達成感、語彙力はついたと思うか、また読みたいと思うか、についてである。まず、内容の難しさについて、小学校高学年を対象にした児童小説ではあるが、アメリカの農場の様子や動物の飼育状況など背景知識がない場合には内容を把握するのが難しい場面もあったのではないかと想像される。そのため、やや難しいと感じた学生の割合が多かったと考えられる。その一方で、内容については面白かったと答えた割合が 7 割以上であった。

課題の多さについては、毎週約 3 章分程度読んでくことを課題として、授業では該当する章の内容についての概要と共に理解を確認する質問事項に基づいてグループで話し合いながら回答していく時間を取った。この課題の多さについてはちょうど良い、またはやや少ないと感じていた学生の割合が最も多く、1 週間で読むペースとしては適切であったようである。このような課題を経て読み終わった結果、最終的に読後は 9 割近い学生が達成感を感じる結果となっている。一方で、後半になって時間が不足した際には課題を増やした週もあったため、ペースを崩さないよう時間配分に十分留意する必要性はあった。

更に、語彙力については約 9 割の学生がついたと感じた結果となっている。上記の語彙の調査では、高頻度で出現している単語及び 2 語連鎖、3 語連鎖に焦点を当てたが、単語の

みならず繰り返し出現する連鎖する複数の語句に触れることは、新しい単語を学習することと同様、総合的な語彙力についての自信にも繋がると考えられる。今後またこのような長編の児童小説を読みたいと思うかという質問には、7割近くが読みたいと思っており、内容の難しさを感じながらも面白さや達成感、語彙力についての自信に対する肯定的な意識が、今後の意欲にもつながったのではないかと想像される。

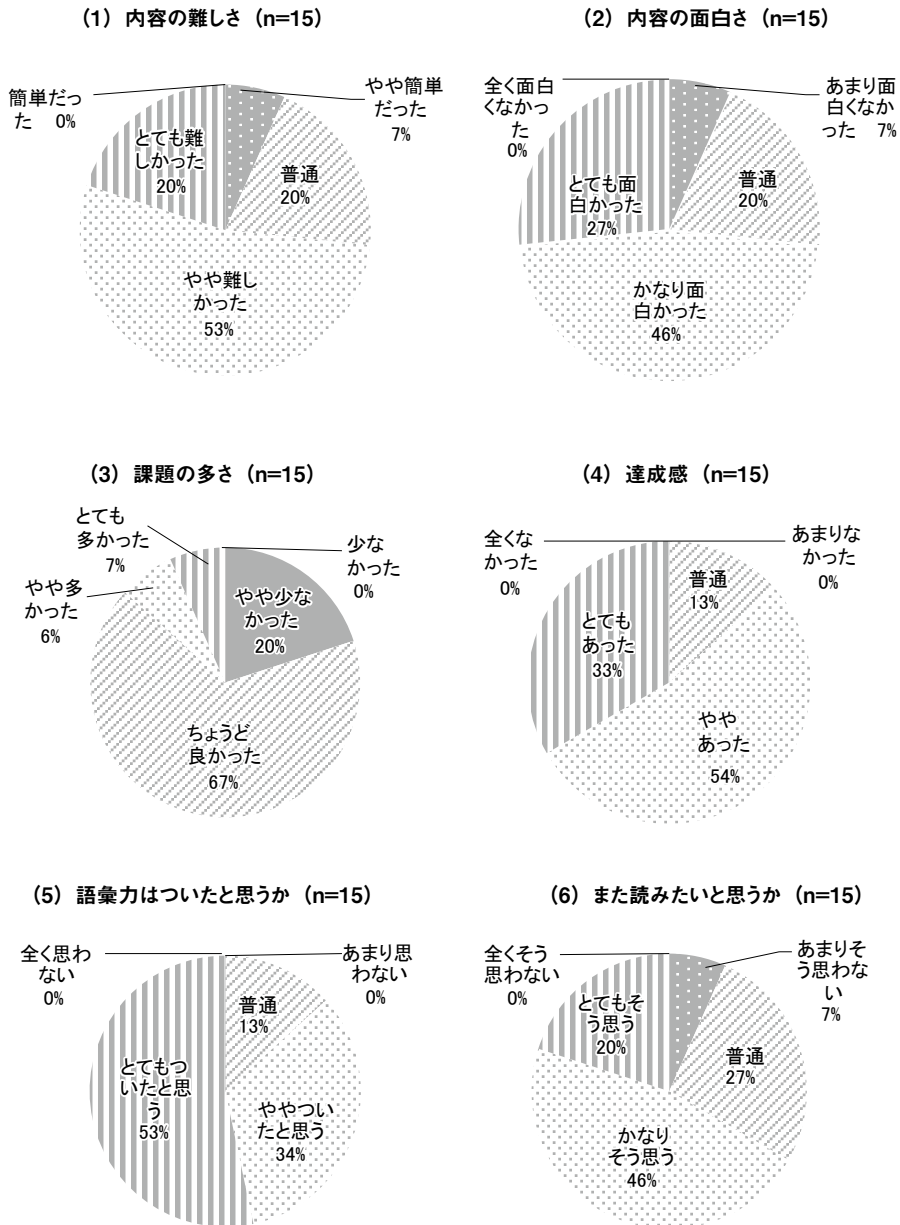


図2 児童小説についての読後の意識調査

5. 学生からの記述回答による調査結果

上記の質問項目による回答以外に、自由記述によるアンケート結果を見ると、まず語彙や文章についての良かった点として以下のような意見が見られた。

- ・いろいろな言葉使いや表現を楽しめた。
- ・入試等ではあまり触れないような言葉に出会えた。
- ・多くの英文に触れられた。
- ・何度も出てくる単語があり、その単語を覚えることができた。
- ・分からない語彙があっても、そのまま読み進めてその語彙を想像するする力がついた。
- ・テキストで読む英文の量とは比較にならない文や語彙の多さだったので、英文に慣れることができた。

その他の点については、以下のような感想が得られた。

- ・問題を解くための英語ではなく、読みものとして英語の楽しさを見つけることができた。
- ・授業で取り上げられないと原書を読む機会や時間がなかったのでよかった。
- ・ほかの英語の本も読める気になった。
- ・外国の文化に触れられたところがよかった。
- ・難しい内容ではなかったので、読み進めやすかった。
- ・原書への親近感が湧いた。
- ・授業で質問に答える形式のため、内容が頭によく入った。

一方で、改善の必要があると思われた点については、以下のような意見があった。

- ・読む量が多くて時間がかかり大変だった。
- ・ペースが速いと感じ、忙しい週は読むのが大変だった。
- ・教科書と同時進行だったため、内容の理解が浅いまま進んでしまった。

これらの記述において、長編の児童小説を読むことによって、テキスト以外のジャンルにおける新しい言葉との出会いを楽しみ、また繰り返しそのような語彙に触れることで慣れることができるという実感を得ていることが指摘された。また、授業で課題が出されることが契機となって、原書への親近感が生まれたり外国の文化を英語で楽しめたりする点を、肯定的に受け止めていることが分かった。その反面、読む量が多く、ペースが速いと感じたり、内容理解が不十分だったと思ったりした学生もいたことが分かり、長編の作品を読む場合の課題であると言える。

6. 考察と今後の課題

以上述べてきたように、アメリカのロングセラー児童小説である“Charlotte’s web”には、BNC written textsに見られるような一般的な書き言葉と共通した高頻度単語が多く出現し、また2語連鎖、3語連鎖においてもBNC written textsと共通して前置詞を含む表現が高頻度で使用されていることが分かった。特に、3語連鎖においては内容と直接関連性が高い単語と前置詞の組み合わせや位置を表す前置詞を含む語句が高頻度語として顕著であった。多様な英語の前置詞の習得は日本人学習者にとって容易ではないが、個別の前置詞の概念を理解することに加え、何度も繰り返し多くの前置詞を含む語の固まりや文に触れることが重要であると考えられる。また、高頻度基本単語リストのうち7割弱が含まれていることから、基本語彙の学習に役立つ教材と考えられる。これらの調査と分析に基づいて考えると、この児童小説における語句に触れることは高頻度基本単語や前置詞を含む語句の学習につながると思われる。

また、学生に対するアンケート調査より、長編の原書を読むことは、負担であると思ったりやや難しいと感じたりする一方で、内容の面白さを多くの学生が実感すると同時に、達成感や語彙力、原書を読むことに対する親近感を持つ結果をもたらすことが分かった。TOEICのスコアの伸びと本児童小説を読んだこととの直接の因果関係は本研究では分析していないが、多様なジャンルの英語に触れること、繰り返し同じ語彙または同じ単語の連鎖に触れることは、総合的な英語力の向上にも肯定的な影響を与えるのではないかと予想される。

本研究は、総語数は30,000語強の1冊のみを対象に巨大英語コーパスであるBNCと比較した。今後は、他の児童小説についても調査し、単語レベルのみでなくn-gram単位でのより詳細な特徴や傾向について分析したいと考える。学習者が多様なジャンルの英語に触れながら英語力の向上を図れるよう、より適切な教材の語彙表現についてさらに研究することを今後の課題としたい。

参考文献

- 赤野一郎・堀正広・投野由紀夫 (2014). 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』大修館書店。
- 小山由紀江・水本篤 (2010). 「単語連鎖にみる科学技術分野と他の分野の英語表現比較」『統計数理研究所共同研究レポート』239, 1-11.
- 高橋和子 (2015). 『日本の英語教育における文学教材の可能性』ひつじ書房。
- Anthony, L. (2014). AntConc (Version 3.4.3) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <http://www.laurenceanthony.net/>
- Biber, D., & Barbieri, F. (2007). Lexical bundles in university spoken and written registers. *English for specific purposes*, 26(3), 263-286.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., Finegan, E., & Quirk, R. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow, Essex: Pearson Education.

- Carter, R., & McCarthy, M. (2006). *Cambridge grammar of English: A comprehensive guide; spoken and written English grammar and usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Chen, Y. M. (2006). Using children's literature for reading and writing stories. *Asian EFL Journal*, 8(4), 210–232.
- Cortes, V. (2004). Lexical bundles in published and student disciplinary writing: Examples from history and biology. *English for specific purposes*, 23(4), 397–423.
- Gajdusek, L., & vanDommelen, D. (1993). Literature and critical thinking in the composition classroom. *Reading in the composition classroom: Second language perspectives*, 197–218.
- Iwahori, Y. (2008). Developing reading fluency: A study of extensive reading in EFL. *Reading in a Foreign language*, 20(1), 70.
- HarperCollins Children's. Retrieved October 2, 2017 from <http://www.harpercollinschildrens.com/HarperChildrens/kids/gamesandcontests/features/charlottesweb/default.aspx>
- Kramsch, C., & Kramsch, O. (2000). The avatars of literature in language study. *The Modern Language Journal*, 84(4), 553–573.
- Leal, P. (2015). Connecting reading and writing using children's literature in the university L2 classroom, *Reading in a Foreign Language* 27, No.2, pp.199–218.
- The top 100 children's novels list*. Retrieved September 30, 2017 from http://blogs.slj.com/afuse8production/2012/07/07/top-100-chapter-book-poll-results/#_
- Test and Score Data Summary for TOEFL iBT® Tests 2015*. Retrieved September 30, 2017 from https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
- Test and Score Data Summary for TOEFL iBT® Tests 2013*. Retrieved September 30, 2017 from <https://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-2010.pdf>
- Test and Score Data Summary for TOEFL iBT® Tests 2010*. Retrieved September 30, 2017 from http://www.toefl.com.tw/iBT/pdf/2013_TOEFL%20Test%20and%20Score%20Data%20Summary%E2%80%8B.pdf
- Walther, I. (2007). Ecological perspectives on language and literacy: Implications for foreign language instruction at the collegiate level. *ADFL bulletin*, 38(3), 6–14.
- West, M. (1953). *A General Service List of English Words*. London: Longman, Green and Co.
- White, E. B. (1952). *Charlotte's web*, Harper Collins Publishers.
- Wray, A. (2002). Formulaic language in computer-supported communication: theory meets reality. *Language Awareness*, 11(2), 114–131.
- Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency. *System*, 36(4), 661–672.